

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：23903

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19H03936

研究課題名（和文）対人関係療法をとりいれた摂食障害親子プログラム開発と地方都市支援ネットワーク創造

研究課題名（英文）Development of family support program for parents of patients with eating disorders based on interpersonal psychotherapy &#8211; Promoting of support network in local cities-

研究代表者

香月 富士日（Katsuki, Fujika）

名古屋市立大学・大学院看護学研究科・教授

研究者番号：30361893

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 11,800,000円

研究成果の概要（和文）：1つ目の研究は摂食障害の母親を対象とした研究を行った。その結果、サポートがあると感じている母親は、抑うつが軽くなる傾向があった。また、約2年間の間に、サポートが増えたと感じた母親群はそうでない群と比較して、傾聴態度や傾聴能力が改善している。つまり、患者の話を注意深く聴くことができるようになってきているものと考えられる。併せて孤独感も軽減している。

2つ目の研究は、思春期および青年期の摂食障害患者の親に対する対人関係療法を活用した遠隔家族サポートプログラムを開発し、RCTデザインを用いて効果検証をしている。こちらの研究は現在継続中である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本では、摂食障害に対する有効な治療は行き届いておらず、患者も母親も非常にストレスの高い環境で過ごしている。そのような中、母親にサポートがあれば、孤独感や抑うつ感も減り、患者の話を傾聴しやすくなることわかった。さらに間接的に患者本人にも良い影響が期待できる。治療環境が十分でない中では、サポートプログラム開発やシステム構築、蓄積は意義のあることと考える。

研究成果の概要（英文）：The first study of mothers of patients with eating disorders showed that high social support for mothers was significantly associated with lower loneliness and depression. In addition, the study investigated differences in mothers' active listening attitudes, mental health, loneliness, and self-efficacy improvements over 18 months between mothers who did and did not experience increased perceived social support. The degree of improvement in active listening attitude and loneliness was significantly greater in the improved social support group than in the non-improved social support group. Our findings indicate that increasing mothers' perceptions of social support will be associated with improving their active listening attitudes. The second study designed RCT aimed to examine the effectiveness of remote family education and support program for parents of patients with adolescent and early adulthood eating disorders based on interpersonal psychotherapy. This study is ongoing.

研究分野：精神保健看護学

キーワード：摂食障害 家族支援 対人関係療法 家族心理教育

1. 研究開始当初の背景

摂食障害は、日本では若年の女性を中心に近年増加している。摂食障害は5%と高い死亡率であり、一般人口に比べて神経性やせ症は5.35倍、神経性過食症は1.49倍、過食性障害では1.50倍の高い死亡率である。摂食障害患者は家族を巻き込みやすく、家族の身体的精神的負担も大きい。神経性やせ症の家族63名を対象とした横断調査では、家族の身体的精神的負担が大きいほど家族機能は弱まることが示唆されている。このため、本人の苦痛はもちろん家族の疲弊も深刻な問題である。神経性やせ症治療では、家族療法が注目されている。Maudsley Model 家族療法は、思春期に対しての治療効果が確認され中等度のエビデンスが得られている。しかし、家族療法はトレーニングを受けた専門家が行う必要があり、摂食障害かつ家族療法の専門家という人材は非常に少なく、ニーズのある患者にサービスが行き届くことは考えにくい。

そこで、まずひとつ目の研究(研究)では、専門家が行う家族療法よりは構造がゆるやかなセルフヘルプグループでの家族支援でも家族が知識と対処方法を得ることで、孤独感や自己効力感が改善し、それが患者の摂食障害症状の改善に寄与するのではないかと考えた。家族へのサポート状況が患者の病状に影響を与えているかを横断研究とコホート研究を用いて検証することを目的として研究を行った。次に、2つ目の研究としては(研究)、対人関係療法を活用した看護師などの精神保健の専門家が提供する家族支援プログラムを作成し、遠隔会議システムを利用して実施し、その効果検証(パイロット RCT)を行った。

2. 研究の目的

【研究】

1つ目の研究は、コホート研究デザインを用い、摂食障害患者の母親が家族会などのサポートを得ることで、家族システムの悪循環が改善され、結果的に患者の摂食障害症状改善に結びつくことを検証することを目的として行った。

【研究】

私たちは、精神疾患患者家族への支援方法として確立されている家族心理教育と摂食障害治療に対する一定のエビデンスのある対人関係療法の要素を加えた家族支援プログラムを作成した。2つ目の研究目的は、このプログラムの効果は無作為割付比較試験の研究デザインを用いて検証することである[2]。

3. 研究の方法

【研究】

摂食障害と診断された患者とその母親を対象とし、3時点(ベースライン・9か月後・18か月後)でアンケート調査を行った。患者への質問内容は、摂食障害症状(Eating Disorder Inventory)、孤独感(UCLA 孤独感尺度)、自尊心(Rosenberg Self-esteem Scale)、アサーション(青年用アサーション尺度)、家族機能(Family Assessment Device)、母親へは、自己効力感(General Self-Efficacy Scale)、孤独感(UCLA 孤独感尺度)、ソーシャルサポート(Social Provisions Scale-10)、抑うつ感(Beck Depression Inventory-II)、傾聴力(Active Listening Attitude Scale)、精神的健康(K6)であった。各尺度の18か月間の変化量について、共分散構造分析を用いて解析を行った。また、18か月の間に母親のサポートされている認識が増えた群とそうでない群で、各尺度の増加量に差があるかをt検定を用いて2群間の比較分析をした。有意水準は $P<0.05$ とした。なお、名古屋市立大学大学院看護学研究科研究倫理審査委員会の承認を得たうえで行った。

【研究】

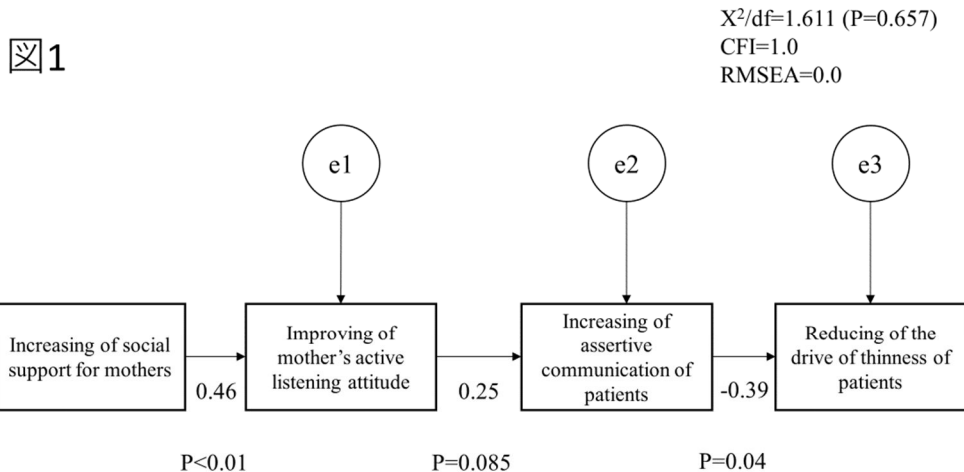
対象者は、摂食障害の診断を受けたことがある、または明らかに摂食障害の症状がある患者の親または養育者であり、登録時患者の年齢は12歳から29歳で同居しているものとした。希望者は参加申し込みをし、書面での研究説明と書面での同意を得たものに対して、介入群と待機群への無作為割付を行った。

介入群には、全4回の各回前半は対人関係療法をベースとした情報提供、後半は対人関係療法をベースとしたロールプレイと対処法を増やすことを目的としストレスに焦点化したグループセラピーを行った。傾聴態度 (Active Listening Attitude Scale)、サポート状況 (Social Provisions Scale-10)、精神的健康 (K6)、他者評価摂食障害症状 (Anorectic Behavior Observation Scale) を介入前後に評価し、対照群と比較した。データは繰り返し測定線形混合モデルを用いて統計的に分析する。なお、名古屋市立大学大学院看護学研究科研究倫理審査委員会の承認を得たうえで行った。

4. 研究成果

患者・母ともに回答の得られた57組(114名)のデータの解析を行った。母親へのサポートの増加、母親の傾聴態度の向上、患者のアサーティブな会話の増加、および患者のやせ願望の低下の間には有意な関係性がみられた ($\chi^2/df=1.611, P=0.657, CFI=1.0, RMSEA=0.0$)。パス係数は1つを除き有意な値であった。(図1)

18か月の間に母親のサポートされている認識が増えた群とそうでない群を比較したところ、サポートされている認識が増えた群の方が有意に傾聴力が向上しており、孤独感が改善していた ($p<0.002, p<0.012$) [1]。(表1)



'Increasing of social support for mothers' indicate the difference SPS-10 score from T1 to T3, 'Improving of mother's active listening attitude' indicate the difference ALAS score from T1 to T3, 'Increasing of assertive communication of patients' indicate the difference YAS score from T1 to T3, and 'Reducing of the drive of thinness of patients' indicate the difference EDI-drive for thinness score from T1 to T3.

表 1

		Mothers who experienced increased perceived social support group			Mothers who did not experience increased perceived social support group			t value	p value
		Mean	SD	n	Mean	SD	n		
Improvement of Active listening attitude	ALAS (ΔT_3-T_1)	3.40	5.90	24	-1.00	4.70	37	3.22	0.002
Improvement of Loneliness	ULS (ΔT_3-T_1)	-1.60	5.59	25	1.70	4.70	37	-2.59	0.012
Improvement of Self efficacy	GSES (ΔT_3-T_1)	0.84	2.27	26	0.44	1.94	38	0.75	0.455
Improvement of Depressive symptoms	BDI-II (ΔT_3-T_1)	-4.50	7.40	26	-1.70	8.00	38	-1.39	0.167
Improvement of Mental health	K6 (ΔT_3-T_1)	-1.80	3.40	25	-0.51	4.53	37	-1.20	0.234

目標症例数 70 名のうち 54 名が終了した。残り 16 人をリクルート中である。量的分析はデータがそろい次第行う。参加者の感想としては下記のようなものが多かった。

- ◆ 対人関係的コミュニケーションの学びからお互いの「変化」に気づくことができたことは今後の家族の在り方や歩みの第一歩となりました。
- ◆ 対人関係療法の要素を加えた家族支援プログラムに参加させていただき、本人の病気による退行や摂食障害の外在化のフォローばかりに目がいきすぎ、アンバランスに「小さい子供の親の立場」での考え方で接している場面を自覚できました。

参加者の感想は許可を得て研究用 HP にすべて掲載している[3]。

文献

1. Katsuki F, Yamada A, Kondo M, Sawada H, Watanabe N, Akechi T: **Association between social support for mothers of patients with eating disorders and mothers' active listening attitude: a cohort study.** *Biopsychosoc Med* 2023, 17(1):4.
2. Katsuki F, Watanabe N, Kondo M, Sawada H, Yamada A: **Remote family education and support program for parents of patients with adolescent and early adulthood eating disorders based on interpersonal psychotherapy: study protocol for a pilot randomized controlled trial.** *J Eat Disord* 2024, 12(1):61.
3. 研究用ホームページ「摂食障害・遠隔家族サポートプログラム」<https://ed-kazoku.jp/>

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 Fujika Katsuki, Atsurou Yamada, Masaki Kondo, Hanayo Sawada, Norio Watanabe, Tatsuo Akechi	4. 巻 17
2. 論文標題 Association between social support for mothers of patients with eating disorders and mothers' active listening attitude: a cohort study	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 BioPsychoSocial Medicine	6. 最初と最後の頁 4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1186/s13030-023-00262-9	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Fujika Katsuki, Norio Watanabe, Atsurou Yamada, Takaaki Hasegawa	4. 巻 8
2. 論文標題 Effectiveness of family psychoeducation for major depressive disorder: systematic review and meta-analysis	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 BJPsych Open	6. 最初と最後の頁 e148
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1192/bjo.2022.543	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Atsurou Yamada, Fujika Katsuki, Masaki Kondo, Hanayo Sawada, Norio Watanabe & Tatsuo Akechi	4. 巻 9
2. 論文標題 Association between the social support for mothers of patients with eating disorders, maternal mental health, and patient symptomatic severity: A cross-sectional study	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Eating Disorders	6. 最初と最後の頁 8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1186/s40337-020-00361-w	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Fujika Katsuki, Atsurou Yamada, Masaki Kondo, Hanayo Sawada, Norio Watanabe, Tatsuo Akechi, Paola Rucci	4. 巻 56
2. 論文標題 Development and validation of the 10-item Social Provisions Scale (SPS-10) Japanese version	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Nagoya Medical Journal	6. 最初と最後の頁 229-239
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 Katsuki Fujika, Watanabe Norio, Kondo Masaki, Sawada Hanayo, Yamada Atsurou	4. 巻 12
2. 論文標題 Remote family education and support program for parents of patients with adolescent and early adulthood eating disorders based on interpersonal psychotherapy: study protocol for a pilot randomized controlled trial	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Journal of Eating Disorders	6. 最初と最後の頁 61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1186/s40337-024-01013-z	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 香月富士日, 鈴木高男, 山田敦朗, 近藤真前, 澤田華世, 渡辺範雄
2. 発表標題 摂食障害患者の母親へのサポートと摂食障害症状改善との因果関係: コホート研究
3. 学会等名 第24回日本摂食障害学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 香月富士日
2. 発表標題 摂食障害患者の母親へのサポートが療養に与える影響の探索
3. 学会等名 第23回日本摂食障害学会学術集会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山田 敦朗 (Yamada Atsurou) (10315880)	名古屋市立大学・医薬学総合研究院 (医学)・教授 (23903)	研究計画・リクルート・研究モニタリング・医学的助言

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	澤田 華世 (Sawada Hanayo) (10760770)	名古屋市立大学・大学院看護学研究科・講師 (23903)	介入プログラム開発・介入実践
研究分担者	渡辺 範雄 (Watanabe Norio) (20464563)	京都大学・医学研究科・客員研究員 (14301)	研究計画・生物統計・研究モニタリング・成果発表
研究分担者	近藤 真前 (Kondo Masaki) (30625223)	国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター・認知行動療法センター・研究員 (82611)	研究計画・介入プログラム開発・研究モニタリング

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関